

インドの空に奴風

インドへ風あげに行ってきた。一年ほど前に、海外ニュースで「その日、町の空は風で埋まった」と、町

風、それも奴風をあげてみようではないか」と。

インド西部、ムンバイ（ボンベイ）の少し北にあるアーメダバードで年に一度、一月下旬にインターナショナル・カイト・フェスティバルというのが開かれ、世界中から風あげ名人が集まるらしい。

その日、バラナシからテリを経て、飛行機でアーメダバードに着いた。短い二泊の滞在で、インド人と一緒に風あげを楽しめるよ

めに、下町の小学校の屋上を確保しているという。翌午前中は、町の中心まで全員でウォーキングし、風やさんに立ち寄り、風を持参してきていない人はインド風や風糸を買うことにした。夫がバイクを運転し、妻と子どもを乗せていくつも風を持っていたり、年配の女性も風を小脇に抱えてうれしそうに歩いていた。

昼食後、私たちはいよいよ小学校の屋上に向かった。途中、路上には、バイクや車が忙しく行きかう中を、黒い牛が何頭も放されたまま、のんびり草をはん



アーメダバードの小学校の屋上で、ひとつの風を皆で力を合わせて揚げた=インド



のビルの屋上という屋上は、風あげする人々でいっぱい、空には無数の風が飛び、電線には風がいくつもひっかかっている映像を見た。「そつだ、ツアーをつくらう！ インドの空に和

うにするにはどうしたらいいか、地図を見ながら作戦を練った。

ローカルガイドによると、私たちが風あげするた

でいた。屋上に着くと、インド人の家族たちが数人、既に風をあげており、

弁当を広げている家族もいた。私たちがもさっそく持参

の風をあげ始めた。ところが、インドの風と日本の風は大いに違うことを知った。インドの風は軽く、すぐ舞い上がるが、

和風の問題は重くてなかなか上がらないこと。糸が短いこと。市販の和風についていた風糸はせいぜい二十

は老いも若きも風あげにたけていたのだった。その日、私たちは、日没まで夢中で風あげに興じた。（トラベルデザイナー）

老いも若きも時忘れ



このまさこの地球を旅のま

せいかつ 21

